僕の出会った詩人たち＃９「マイアミ」　　馬野ミキ

一冊の詩集も出していないし
界隈の人もほぼ彼について知らないだろう
が、一時期マイアミが東京にいた頃、
高円寺・無力無善寺で詩の朗読のステージを共にしたり
HIPHOP雑誌「Blast」のSSWS(シンジュクスポークンワーズスラム)特集にて、詩人VSラッパーという構図のなか
カテゴリー不明系と紹介された自分と、
もう１人ちひろ君が通っていた横浜の大学での学園祭「ミドリゴン」や
自分が実行委員長を務めたウエノポエトリカンジャム３に(当時まだ会ったこともない平居さんにも一部、司会をお願いした)
出演してもらったこともあった

マイアミは缶チューハイを片手に上野水上音楽堂のステージにふらふらと立ち
即興で詩を行う
というか、言いたいことをただ言うw
だからテキストという意味では何も残ってないだろう
なんでもあると言われるこのインターネット上のデータのなかにも
彼の詩人としての功績はまったくバックアップされていないばずだ

マイアミは的確に「場」の状況を捉え、その「場」にいる人たちに伝える
純粋にただ、それだけのことだ
その即興が
あらかじめ作品を仕込んできた自分のパフォーマンスを上回るのであるから
俺としてはお手上げの状態だ

「マイアミ、すげーよかったよ」とステージを終えた彼に伝える
そうすると「ミキちゃん！これを日常生活のなかでやらなくちゃだめなんだ！」と励まされる
確かにそうだね
ライブハウスや表現力と言うのは、別に人生の目的ではない
人間にとって、人類にとって「表現」とは何の為に存在するか

こういう感じのマイアミであるので
詩の界隈での自分の身の置き方等にまったく興味が無い
彼を見ていると自分がミーハーに思える程だ
詩作は目的ではない
自分が詩人でなくても別に構わない
マイアミは、いまはまったく別のことをしているだろう
人間にとって、人類にとって「表現」とは何の為に存在するか

時々手伝いに行かせてもらっている蟻鱒鳶ル(アリマストンビル)の岡君が
いつかマイアミと吉増剛造のパフォーマンスを観に行った時
マイアミは観客席で立ち上がり怒鳴ったそうである
前衛的なステージと
実際よく分かんないけれど、これが深くて良いものなのだと納得しようとしている行儀のよい聴衆たちに向けて

「こんなんでよいのかよ！」と怒鳴ったそうだ。